

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	独居の看取りから学んだボランティアの役割と今後の課題
演者名	安藤真弓 1) 大石奈央 1) 山中ゆかり 1) 胡曉華 1) 2) 大杉泰弘 1) 2)
所属	1) 穎田病院 2) 飯塚病院総合診療科

結言

穎田病院では、年間約 100 件の在宅での看取りを行っている。その中で独居でも自宅で亡くなることを希望する患者も少なくない。今回、医療従事者に加えボランティアの協力で独居のがん患者の自宅看取りを行った事例について紹介する。

事例紹介

W 氏、82 歳男性、成人 T 細胞白血病リンパ腫ターミナルと診断された。好きな事をやりながら自宅で過ごすことを希望され、F 大学病院より当院への紹介があり訪問診療を開始した。長女は当地福岡から遠方の東京に住んでおり独居であった。

経過

開始時から協力頂いたボランティアの友人のように接したいという方針により、一緒に買い物やカラオケ、自宅で食事会も行った。また、W 氏の家族に対する思いや病気に関する不安など私達医療者には語る事のなかった本心をボランティアには話し、信頼関係の強さがあった。ボランティアとは情報交換を電話で 1 回/週行っていた。最期まで高い QOL を維持し、自宅にて永眠された。

その後ボランティアの方にインタビューを行った。日々変化する W 氏の病状に不安があった事、W 氏からの相談をどこまで誰に伝えるか悩んだ事、ボランティアの役割、医療者の役割が明確でなかった為に戸惑いがあった事などがわかった。私達は十分な情報交換が行えていると考えていたが、ボランティアの不安軽減にはつながっていなかった。

考察

独居の方や家族が安心して在宅で過ごし QOL の高い環境のためには、ボランティアが関わることは非常に有意義なことである。そのためには看護師が、患者・ボランティア・家族・その他の医療者の間に立ち情報共有・不安の解消・関係性作りをすることは非常に重要で専門性の 1 つ考える。今後高齢人口の増加、核家族化が進むことで独居看取りが増加可能になると予想され、そのためには、独居高齢者に関わることのできるボランティアの育成と、ボランティアの役割・本質を理解した看護師の教育が不可欠である。